

授業科目  
担当教官  
科目区分  
受講生数

哲学Ⅰ：倫理学Ⅱ：キャリアデザイン論Ⅱ  
寿 卓三  
教科専門（2回生、3回生、2回生後期）  
26：10：13（回答者＝最終回の出席者）

## 1. 授業評価（5段階：a 良い～e 悪い）

問1 出席状況

a3:1:4 b12:8:8 c10:1:1 d1:0:0 e0:0:0

問2 講義への意欲

a7:6:8 b12:4:4 c7:0:1 d0:1:0 e0:0:0

問3 講義のテーマ・目的の明確化

a2:3:4 b19:7:8 c4:0:1 d2:0:0 e0:0:0

問4 学生同士の話し合いの有効性

a10:6:10 b14:2:3 c2:2:0 d0:0:0 e0:0:0

問5 学生の発言への寿の対応の是非

a7:5:6 b17:5:7 c2:0:0 d0:0:0 e0:0:0

問6 寿の授業への熱意、工夫

a12:5:6 b12:4:7 c2:1:0 d0:0:0 e0:0:0

問7 授業のレベル

a1:0:4 b5:5:9 c12:3:0 d7:2:0 e1:0:0

問8 講義の収穫

a7:5:6 b17:5:7 c2:0:0 d0:0:0 e0:0:0

問9 講義のお勧め度

a3:8:7 b17:2:6 c5:0:0 d1:0:0 e0:0:0

問10 この授業でよかった点

### 【哲学Ⅰ】

探究性があったこと。他人と意見を交換する場があったこと。

### 【倫理学Ⅱ】

今まで考えたことのないアプローチだった。

### 【キャリアデザイン論】

センターの人と話す機会があり、社会の先輩としてすばらしい話をきけた点が良かった。

問11 改善すべき点

### 【哲学Ⅰ】

- ・課題提出までの時間が短いように感じたので、もう1日増やした方が良かった。
- ・前回の授業の観想を扱う時間が長い。

### 【倫理学Ⅱ】

難易度が高かった。

### 【キャリアデザイン論】

教室がもう少し広い方が良かった。

## 2. 授業者のコメント

教育実習や学生の卒論の現状を見るにつけ、焦燥感が募ってくる。基礎的知識の貧困、それに由来する問題意識の一面性、事象間の繋がりへの目配りの不足、…問題点ばかりが気になる。

グローバル化時代、高度知識基盤社会に適応するためのポストモダン型学力として、「問題を発見し、解決する力」、「グローバルな視点とリーダーシップ」、「幅広い強要と高い倫理観」、「高度な専門知識」、「全体を俯瞰する力」、「競争を勝ち抜く強い意志」、「市場ニーズを感じ取る知性と感性」そして「自ら学ぼうとする強い意欲」といったことが掲げられる。基礎的知識の習得、学ぶ姿勢の習得といったことに危うさを感じている私としては、大学における学びの現実と社会や時代の要請とのギャップの大きさに啞然とする。そして、私たちの直面する今、この現状とあまりにもかけ離れたこのようなポストモダン型学力の必要性が云々されることに少なからぬいらだちを覚える。

しかし感傷にふける暇はない。教育が直面している課題は様々であるが、その根幹に関わると思われる問題について昨年に引き続き再度、愚見を確認しておきたい。教員がいかなる問題意識、課題意識を持って講義を構成しているかが講義の意味を議論する前提と考えるからである。欧州の政府債務危機は、民主主義のよろさを露見させている。古代ギリシャ以来、民主主義は容易に衆愚政治に転化する危険性を持つことが自覚され、それを防ぐ工夫が成されてきた。それが個・私と全体・公とが直接対峙しない仕組みである。公の不在なしは後退が直ちに、個の放恣に至らない。また、個の放恣が、全体・公の暴走を招来しない。個が相互に調整しつつ自分達の声が社会に届くように練り上げていくと同時に、公も直接的に個に干渉することで個の創意性を挫かないように社会という媒介項を介在させる。それが公publicと私privateを繋ぐ共commonの領域である。しかし、共の領域の形成には時間がかかり、スピード感の欠如は、停滞感といらだちを生じさせる。ここに、動かぬ政治よりはブレーキのかかない政治の方がましだという選択をする危険性が常にある。今私たちは間違いなくそのような選択に直面している。このような危険性を回避するには、私たち一人一人の政治意識の成熟が必要となるが、教育の重要な課題の一つは、この成熟に貢献することだと私は考えている。キリス

ト教の権威が失墜したとはいえ、ヨーロッパにおいては、破壊された教会再建への地道な努力が今なお継続されている。そして、美術館の常設品として人間の生と死を深く見つめた作品が展示され若者たちの学びの場となっている。日本において、このような人間の生死をめぐる体験が子どもたちの日常において繰り返し学びの対象となることはない。彼我のこの相違が若者の人間形成に大きな差となって現れることを恐れる。子どもたちの人格の陶冶に私たちはどう責任を持つのか。憲法論議や戦後体制の見直しが政治日程に上っている今、そのことが改めて問われているのではなかろうか。

ここで考察する3つの講義は、いずれも個別・小集団・全体という学習形態を通して、生産・流通・消費・廃棄という分業体制を相対化し、廃棄が同時に再生産の場となり、生産者と消費者とを統合した生活者としての当事者意識の涵養こそが市民意識の形成に他ならないという前提の下で数年来継続したスタイルで展開されている。講義の後のコメントをメールで提出し、そのコメントのなかから授業の展開の深化に連なると授業者が判断したものを選び出してフィードバックし、講義の連続性を創造していくという手法をとっている。それゆえ、学生のコメントがかなり重視される。その結果、学生からはもう少しコメントを書くための日数を確保してほしいという声もある。逆に、前回の講義を振り返る時間をとりすぎて当日の考察や議論の時間が不足するという不満の声もある。学生のコメント、学生相互の議論、教員による説明。この三者のバランスをどうとっていくかはいつも苦慮する課題である。

それぞれの講義の目標は異なる。【哲学1】では、『カラマーズフの兄弟』における、「卑怯者のまま死のうが、高潔な男として死のうが同じだ！」というニヒリズムの論理を生きていた長兄ドミートリーが、「卑怯者のまま生きることが不可能なだけじゃなく、卑怯者のまま死ぬことも不可能なんだ。死ぬときは誠実でなくちゃいけない！」と大きく変容する有り様を考察し、この飛躍の意味を解明することを目指す。【倫理学Ⅱ】は、過去との対話の積極的可能性を探る営みを通して、内と外との境界を設定し、それを味方と敵へと分断して不可避的に他者への暴力を招来する二分法的な思考様式や行動様式から自由になる可能性を探ることを目指す。そして、【キャリア

デザイン論】では、今年度は趣向を変えて、女性未来育成センターのスタッフに自らのキャリア形成の過程を具体的に語ってもらう機会を中心に展開した。このことについて、問5、6で質問したが学生からは生の声が聴けてとても良かったし、勇気が出たという声が多くあった。就職難という状況の歴史的世界的社会的背景を理解すると同時に、そのような状況に対峙し、たくましくしなやかに生きる力を修得するいい機会になったようである。

キャリアデザイン論は、人間社会デザインコースの学生だけが受講する科目であり、他は社会科教育専修と人間社会デザインコースの学生が共に受講しているが、専修やコースの相違は学習上全く問題にならなかった。全体として高い評価だと判断するが、その要因は昨年同様に2点挙げられるだろう。一つは、智の分業体制から脱却すべく、メールによるコメント提出や学生の話し合いを積極的に取り入れたことである。二つ目は、ケアということに対する私の理解の転換が講義に反映していることが挙げられよう。私たちは普段暗黙のうちに、一般の人はケアを必要とせず、ケアを必要とするのは何らかの障害を持つ特殊な人たちだけだと思い込んでいないだろうか。しかし、一般の人とは、ケアを必要としない人ではなく、むしろケアされる状況や環境を自力でいつでも調達できる人であり、したがって実は四六時中ケアされている人だと言うべきではなかろうか。心がくしゃくしゃすれば、気の置けない友人に愚痴をこぼしたり、音楽を聴いたり、散歩に出かけたり、酒を飲みに出かけたりと、基本的にはいつでも「気を晴らす」環境に身を置こうとする。しかし、一般にケアが必要だとされている人たちは、基本的にはケアを受けているときにしか、みずからの欲求を充足させたり、心配事を取り除くことはできない。それ以外の多くの時間を、彼らは意のままにならない状況に耐えているのである。つまり一般の人たちこそむしろ絶えずケアの中で癒されていながらそのことを自覚できない人たちであり、ケアが必要だとされている人たちはほんのわずかなケアで満足することを強いられている人たちだとも言える。このような状況に対して私たちの学びはどう立ち向かうのか。3.11以後はこの問いが学びの $\alpha$ であり $\omega$ となる。昨年同様の感想であるが、手抜きの報告なのだろうか？